

目的論の不在を乗り越えるための共生社会とWell-being

細川英雄（言語文化教育研究所）

0. はじめに

- 日本語教育の目的とは何か—**1990**年代以降の多様化と枠組み概念
- その多様化と目的論の不在の意味
- 「共生社会のための日本語教育」— 当該分野領域の目的としての**Well-being**の困難性と可能性へ

1. 日本語教育の枠組みと展開

- A) **1960～70年代** 構造言語学的（語彙・文型リスト，言語の構造・形式に関する知識，教師主導）**leaning to know**（何を学ぶか）
- B) **1970～80年代** 応用言語学的（言語の機能と場面の関係，コミュニケーション能力育成，学習者中心）**leaning to do**（どう学ぶか）
- C) **1990年代後半以降** 社会構成主義的（自己・他者・社会，活動型教育，学習者主体）**leaning to be**（なぜ学ぶか）

1. 日本語教育の枠組みと展開

- **A**から**B**へ， **70**年代から**80**年代へ—日本語教育の技術的な洗練—「コミュニケーション能力向上」（言語知識＋場面運用）
- 「学習者中心」—教師が持つ正解を得るために、学習者が中心的に活動する
- 言語習得によるコミュニケーション能力向上の、その次にあるものは何か？—**90**年代後半からの**learning to be**（なぜ学ぶか）

2. 共生社会のための言語教育

- ユネスコ「**21世紀教育国際委員会**」による報告書「**学習:秘められた宝**」 (**Learning: The Treasure within**、**1996**年ユネスコ)の学習の**5本柱** (当初の4本柱は、のちに5本柱に変更)。
 - 知ることを学ぶ (**learning to know**)
 - なすことを学ぶ (**learning to do**)
 - 人間存在を深める学び (**learning to be**)
 - とともに生きるための学び (**learning to live together**)
 - 自身を変容させ、社会を変容させるための学び (**Learning to transform oneself and society**)

2. 共生社会のための言語教育

- 『ヨーロッパ言語共通参照枠**CEFR**』（欧州評議会**2001**年公開出版）—言語教育の分野で**共生**という概念を明確に提示—人の移動を促進する欧州において言語・文化が異なる人と「共に生きる」ための空間を作るための言語政策のツール
- 欧州評議会の言語教育の目的—社会的結束、民主的市民性形成、相互理解、言語の多様性、複言語主義、教育実践としてのアクション・アプローチ、**社会的行為主体（social agent）**
- 「ともに生きるための言語教育」（福島）= 共生社会のための言語教育

2. 共生社会のための言語教育

- 「共に生きる」ための言語教育—一人が話す「言語」から，言語を話す「人」に
- 言語能力の意味—「人」としての生を十全に営み，社会参加できる力
- 「社会的行為主体」—「言語」と「人」をつなぐ概念—市民性形成のための教育—「外国人労働者」= × 「労働力」○ 「人」
- 「共に生きる」日本語教育の中心的課題—「社会的行為主体」探究と実践開発

2. 共生社会のための言語教育

• 自由と自由の相互承認

言語使用者(学習者を含む)の自由—「この私」の表現
したいことの自由

その自由の相互承認—他者にもまた同じ自由がある—
他者ととともに共生する社会

• 社会契約としての法

自由とその相互承認のためには、社会契約としての法の
必要性

• 理念と活動実践の統合と遂行—自己・他者・社会について考える
本質観取の活動—**learning to be** (あり方を学ぶ)

3. 共生社会のためのWell-beingへ

- 共生社会のための日本語教育
- **ことばの活動の自由**— 一個人一人一人**個別**、他者との**協働**が必要、固有の個性が発揮できる環境
- 他者ととともに**共生する社会**においてそれぞれが「よく生きること**Well-being**」であることを共有する喜び
- ウェルフェア・リングイステイクス— 徳川宗賢 (1999)、平高 (2013)、川上 (2019) — ソクラテス「善く生きること」

4 おわりに

- 日本語教育の目的論の不在を乗り越える
- 言語使用者の自由と相互の**Well-being**をめざす共生社会のための日本語教育
- 言語能力向上の次に向けて、日本語教育の内実を革新する、社会変革としての言語教育学
- 人間の学としての回復、新しい市民社会を構想